

MCC雑感2009-1

於：丸紅本社1階・コンチェルト

参加：13名

1) 2008年の回顧（忘年会に際してのメモより抜粋）

社会は目まぐるしく動いており、大恐慌をも思わせるような世界的不況に見舞われながら、日本では安倍、福田という無責任宰相の放り出した政権は今や麻生太郎という危なっかしく且つお軽い総理の手に委ねられています。

年金問題、医療問題もすっきりせず、地球温暖化、食糧危機、地震災害などの不安を抱える我々の老後は必ずしも安穩ではありません。

更には中東の紛争は一向に静まらず、テロは何時日本にも飛び火して来るか予断を許さないような危機感を覚えます。

こうした悲観材料ばかりの背景の中で、これまで全く予想すら出来なかった黒人の合衆国大統領が出現と、北京オリンピックの成功に象徴される中国の経済的大飛躍は未来に向けての変革の兆しでありましょう。

そろそろ終末期の準備を始めなければならない、後期高齢者ではありますが、21世紀に生きている我々にとっても、まだまだ刺激に満ちた明日が待っているようにも思えますね！！

MCCが始まってから10年目になりますが、2008年は創設メンバーの小林通利さん、大塚康さんのお二人を喪うという悲しい年になりました。

また、メンバーが高齢化してそれぞれに病苦を抱えたり、身内のご不幸に遭ったりもしておりますが、おしなべて皆さんお元気で毎月の例会は高い出席率を維持しており、会は大塚昭さん、矢野昭二さん等のご尽力により順調な運営が行なわれています。

IT社会はコンピューターのパラダイム・シフトが進んで、20年に一度の変革の年とすら云われているようです。

クラウド・コンピューティングと称される、インターネットの劇的進化により、個々のパソコンがそれぞれの機能を活かすというのではなく、インターネットで結ばれた世界中のパソコンが情報を管理し、内容を充実させているという時

代になったのです。

このことは、グーグルの飛躍的發展、マイクロソフトの姿勢の変化にも如実に現れており、今や世界中のパソコンはULCPCが大多数を占めるようになるであろうと予言されてすらいるのです。

マイクロソフトの誕生から四半世紀を経て、パソコンの進化は大きな変革の節目を迎えているように思えてなりません。

MCCでは、2008年には次のようなテーマで研修を行ないました。

- 1月 データベース
- 2月 PDF
- 3月 インターフェース
- 4月 NGN
- 5月 パソコンの寿命
- 6月 ファイルの徹底理解
- 7月 ビル・ゲイツの引退
- 8月 たった3秒のパソコン術
- 9月 光ディスク
- 10月 ULCPC
- 11月 Windows-7

今年は初めて年間を通じて、毎月テーマアップして研修することが出来たので、私としては苦労も多かったが遣り甲斐もあった年となりました。

そして、我々なりにITの変革を見据えたテーマが語られて来たと思負しています??

(実は忘年会に発表した上記の2008年回顧についての一文は、私の独りよがりもいいところで、研修に関するアンケートの回答に示された会員の評価は私の自負とはかなり乖離したものでありました。私が面白いと思っても、必ずしも皆さんは関心は惹かれず、結果的にはテーマの選び方の難しさ、私自身の内容の理解への道が遠いことを改めて再認識させられました。会の運営の難しさが身に染みた次第です。)

2) 今月のテーマ「デジタル・ジレンマ」

新春のテーマとしては、芽出度い項目をとったのですが、昨年12月27日

の日経新聞文化コラムに掲載された、デジタル・データの恒久的保存は困難という見出しに飛びついてしまいました。



日本学術会議が発表した平成17年の「要望書」を簡単にご紹介します。

1) 学術情報のデジタル化

今や論文、書籍、実験データ、統計データその他多くの情報は、殆んどすべてデジタル化され、従来の紙を媒体として印刷される情報を遥かに凌駕しており、そのことが学術研究の発展に多大な貢献をなしていることは疑問の余地は無い。

2) デジタル情報の保存に対する問題点

デジタル化された情報には、その利便性の反面、保存性に大きな弱点がある。

- ① デジタル情報はハードディスクなどの磁気ディスク、CD-DVDなどの光ディスクに蓄積保存されるが、これら媒体の寿命は数年から数十年と考えられ、紙より短い。光学的媒体のある種のもものは100年の寿命とも云われているが、それにしても紙には遠く及ばない。
- ② 媒体のドライブーハードウェアが稼動する状態の保存は、この種技術の進化の速さと商業的目的から考えて、絶望的に短い
- ③ 媒体が正常で、入力装置が稼動したとしても、これらの情報は何らかのアプリケーション・ソフトに依存して作成されており、このソフトが保存されていなければ、データがあっても実際に利用は出来なくなってしまう。
- ④ 更に上記三点がクリアされても、そのソフトが稼動するハードウェア（コンピュータ）及びOSの環境が保存されていなければ、実際の利用は不可能となる。

以上デジタル情報は、広範囲な機能性やコピーの容易さという利便性の裏腹として、アクセスのための環境も共に保存されなければならないという点で、伝統的媒体に較べ保存性に弱点がある。

3) 保存問題の解決に関する技術の現状

- A) 第一に考えられるのは、逆行して紙に保有するという方法。
これは本格的な方式とするには、プリンター出力の改善、保存に堪える印字方法の採用または開発を必要とする。
更にこの方法は音や動画などに対処できないし、ハイパーテキストのようなデジタル情報特有の機能は紙の上に表現できない。
- B) 第二はマイグレーション、定期的に或いはシステム環境が変わる毎にすべての情報を新しい環境にコピーし直して、アクセスを保証する方法。
デジタル情報はコピーを繰り返しても劣化しないから、媒体の劣化による脆弱性を解決することは出来る。しかしながら、アプリケーション・ソフトやオペレーティングシステム環境の変化に対する対策にはならない。
これをも含めてマイグレーションを行なうとすれば、膨大な人手とコストを要する仕事になってしまうだろう。
- C) 第三は標準化、保存する情報を一つ或いは幾つかの標準形式に限定し、この標準形式のデータは、恒久的に将来のシステムでもアクセスを保証して行く方法である。例えば国際標準化機構ISOで勧めるPDFは現在広く

使用されている一つの公的な標準として、アーカイブに使用するという計画である。しかし、そのような前提が成立する範囲は限られているので、これで全面解決というわけには行かない。

D) 第四はエミュレーション、システム環境がかわった時に、それまでのシステムを新しいシステムで動かせるよう、古いハードウェア及びソフトウェアの代わりを用意する方法。

②がデータをシステムに合わせて生かし続けるのに対し、古いシステムごと生かし続けようという方法であるが、これは技術的に十分な検証がされておらず、またソフトウェア、OSを含めて保存する為の制度的保証も必要で未だ構想の域を出ていない。

以上デジタル情報の保存問題の解決方策としては種々考えられているが、限定的な解決にしかならない、或いは有効性の検証が充分でないなど、完全な解決策は見つかっていないというのが実情なのである。

因みに荒川さんが紹介された、芥川賞作家・池澤夏樹氏の書かれた、2004年3月、月刊「現代」の巻頭言「2000年後のDVDは」を付記したい。

某メーカーが「コンピューターの記録用装置を継ぎ足し、データ者を無限に蓄積できるシステムを開発した」という報道があった。

「従来の記録システムは、初めに決めた容量を超えると、古いデータ者を消すか、システム全体を更新しなければならないが、この方法ならば古いデータ者をそのまま保存できる。百年単位のデータ保存が可能になる」

しかし、問題はハードディスクの容量ではなく、ハードウェア全体やOSの陳腐化なのだ。ワープロ専用機で書いていたテキストはだいたい今のPCでは読めない。変換できなくはないが、相当な手間だし。保存のための保存だからつい後回しになる。

今、多くの情報がデジタル化される傾向にある。だが、開けば読める本と違って、コンピューターの情報はハードウェアがなければ意味をなさない。

結局のところ、コンピューター・システムというのは、(自己回帰的な比喻になるけれども) 社会にとってのキャッシュ・メモリー (cache memory) でしかないのではないか。コンピューターの中ですぐに必要なデータを一時的に蓄えるのがキャッシュ・メモリーであり、アクセスは速いけれども短期的。

たぶん、デジタル技術は社会全体の長期的な記憶システムにはなりえない。ベータマックスを思い出そう。今、レーザーディスクも同じ運命を辿りつつ

ある。ウインドウズだって先行きは暗い。

ロゼッタ・ストーンもパピルスも、具体物だったから二千数百年の歳月に耐えてデーターを保持できたし、システムとテキスト、ハードとソフトがセットになっていたから解読できた。今の文明がこのまま千年続くとは思えない。二千年後に DVD 一枚を掘り出した考古学者は途方に暮れるはずだ。

いちばん強いのはやはり紙ということになる。中性紙に刷って世界中にばら撒いておけば、誰かが見つけて解読してくれるだろう。

講談社発行

『虹の彼方に』 池澤夏樹の同時代コラム より

3) 携帯電話

今月副島さんから、携帯電話の解約についての話題が提供された。

私自身携帯電話は「カエルコール」でしか使用しておらず、詳細且つ適切な使い方もロクに知らないで過して来たので、この話題は新鮮だった。

つまり、或る日突然ソフトバンクから、第二世代携帯電話は2010年3月以降は使えなくなるので、新機種への変換を要請されたということで、当の副島さんは、このような技術の進化による古い機種 of 廃棄通告は理不尽であると憤慨(?)されていたわけなのだが.....

MCCメンバーは当日参加者は13名だったが、携帯の利用状況は、NTT 4、Au 3、ソフトバンク 4、無し 2 と、普及率 85% にしては、この副島コメントへの反応は鈍いものだった。

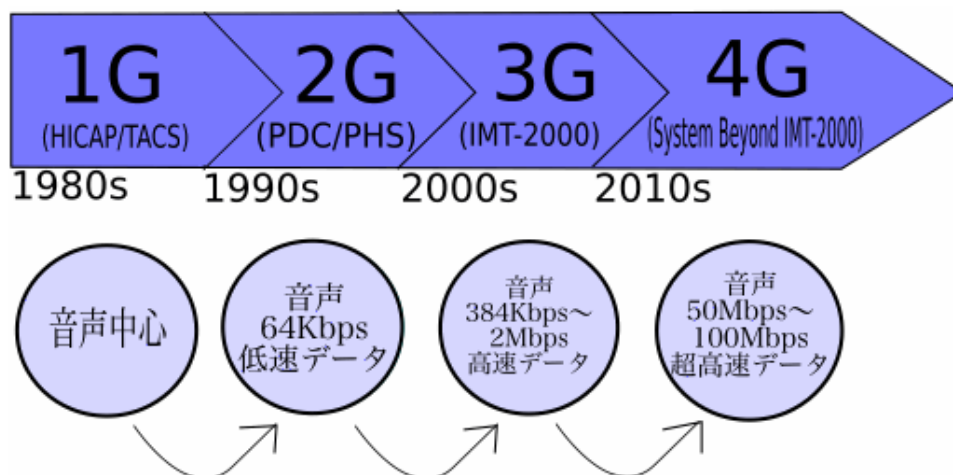
つまり、携帯に関する限り、MCC はかなりなデジタル・デバインドという事?? 要するに、第二世代と言われても何を意味するかが判らなかつたということだったので。(これは全員がという意味ではなく、少なくとも私は全然理解の外でありました)



第一世代

第二世代

第三世代



これを機会に「携帯電話」についてもっとよく勉強しないと、孫にも相手にされなくなるなあと、改めて坐り直したい心境で居ります！！！？？

4) 年初の安全確認

MCC会則で唯一会員に義務付けられているのが、年初の各自PC安全確認で、ウイルス定義の更新と、その上でのシステムの完全スキャン結果の表示を、この10年来やって来ております。

皆さん毎年やっていて、手馴れて来た筈なのに、結構全員がこれをきちんとやらない、或いはやれないのは嘆かわしいことではありますが、まあ今更喧しく云うのもという事でしょうか？

下記に矢野さんの完璧な回答例を示しておきましょう。



—以上—